



匂いが籠っていた。

風邪をひいて薬を飲み過ぎた時の口腔内のような、苦い匂い。

匂いに味覚を感じるなんて、どうかしている。

ましてや汚物の匂いになんて。

右手に持っている赤い傘が鉛の棒のように重たく感じた。

施設から最寄り駅まで続く海沿いの国道を歩く。

きっと、海が鉛色だから、傘が鉛のようだと感じるのだ。

ガードレールが途切れている隙間から体を振りながら海側へと滑り込んだ。

濡れたガードレールに凭れ、荒い波が砕ける岩場を眺めた。

小さく鼻歌をうたいながら、傘をクルクルと回転させてみる。

浜には誰もいない。

釣り人が置いていったのだろうか、薄汚れたクーラーボックスと、こんがらがって綿菓子のようなになった釣り糸が足元に落ちている。

カラスかトンビの折れた羽根。

色のあせたワカメ。

発泡スチロールの切れはし。

ガラスの破片。

淋しいものしか、落ちてない。

鉛色の空と同じ、波の色。

風が無いのか、雨が空から真っ直ぐに降っている。

子供の頃、雨の日の絵を描くと、一面水色に塗りつぶした。

しかし、大人の目に映る雨の色は、気分の色だと思う。

いまは「鉛色」と声に出してみる。

「そうとも限らないわ」

甲高い、そのくせ消え入りそうな細い声が聞こえた。

天地左右に首を動かし声の主を探す。

「こんな色の雨もあるのよ」

岩場の一部が、アジサイ色に変わった。

所々にある水たまりに足を落とさないように注意しながら、岩場まで続くコンクリートの階段を下りて行った。

アメフラシ、がいた。

体長二十センチメートルほどの、アスファルト色のアメフラシが、紫の雨に包まれて岩場で待っていた。

「図鑑で、見たことがあるわ。わたし、あなたのこと知ってるわ」

思わずアメフラシも濡れないように傘を傾けながら、話しかけてみた。

「でも、わたしは写真撮影を許可した覚えなんてないわ。だから、図鑑のそれとは、違うわよ」と少し怒った返事が、か細く響いた。

「どうしてあなたのまわりの雨だけ紫色なの？」

「これ？」

アメフラシが体を震わせると、それはまるで堅めのゼリーのように波打った。

周囲が再び紫の霧に包まれた。

「外敵からね、身を守るために体から出てくるのよ。この液体。美味しくないの。だから敵が逃げらるってわけ。あなたはこの紫に寄せられてきたんだから、敵ではないのね。味方でもないけど」と嬉しそうに体を揺らした。

疲れているのだ、疲れているのだと、二回呟いた。

海で、軟体動物と会話するなんて、どうかしている。

「ふふん。これって、昔から、よくある話よ。迷いが多い人の前に、さらに迷わせるようなものが現れるって話」

そういって、アメフラシは「そろそろ帰るわ」と海へ向かって滑りだした。

「また、会えるのかしら」

「きっと会うわね。あなたは、わたしの好きな匂いがするもの。必要な時はいつでも呼んで」声が海へと潜っていった。

「拘束、といっても昔のようにベッドに縛り付けるとか、動けなくするとか、そう言うことではないのです」

センター長とわたしは、慎重に言葉を選んでゆっくりと、しかし明確に義母に事情を説明した。自らの明け方の奇行について首を傾げ、涙をこぼし、壁を睨みつけ、わたしに八つ当たりをしたあと、やっとベッドで寝静まったのを見届けてから部屋を後にした。

談話用の個室へと移動する長い廊下で、センター長は静かに話し始めた。

廊下の壁には、送り先のない絵手紙や、行き場のない絵画、色あせている書道の半紙などが貼られている。義母の描いた絵手紙も飾られている。送り先の無い手紙は、最後には書いた人たちと煙になって天に昇ってゆくのだろうか。

きっとわたしは将来この施設から義母の絵手紙を渡されたら、どうしていいか分からなくなり、棺の中にそっとしまおうだろう。

センター長によれば、普段の義母は、極めて大人しく施設で過ごしている。他の入所者たちともうまく付き合い、昼間は趣味である編み物をして、時には男性たちに交じって遊びで麻雀もするらしい。

問題は、深夜に起こるのだった。

常に杖を片手にゆっくりと歩いている義母が、ベッドの上で立ち上がり、壁を叩いたり引っかいたりするという。

どうして夜中に立ち上がり、異常行動をとるのか。

電話で報告を受けたときには信じられない気持が大きく、連絡先を間違えているのではないかと

すら思っていたのだった。

あの部屋を見るまでは。

「夜中にトイレに起きることが無くなって、わたしたちも気にかけていたところだったのです。最初は尿がついているパットを壁に投げつけているだけだったのですが、さすがに今回のことが続くと……」

「申し訳ありません。壁紙を拭いてくださったのは、スタッフさんなのかしら。匂いが取れないようでしたら、業者さんをお願いして、一面貼り替えていただけますでしょうか」

義母が、糞尿の付いたオムツを壁になすりつけて回ったのは、明け方のことだという。夜勤のスタッフが朝5時に部屋を覗くと、パジャマのズボンとオムツを脱ぎ棄てて、下半身をむき出しにしてベッドで大の字になり鼾をかいていたという。

「自分では脱げない……鍵付きの繋ぎになっているパジャマがあるんです。それをご用意いただけませんか？ 家族の許可が無いと、我々が勝手に利用するわけにはいかないのです。しかし、今後も壁紙にこのようなことがあると器物破損で、こちらでお過ごしいただくことが困難になってきますので……」

申し訳なさそうなセンター長の声を聞きながら、夕食を何にしようか考えていた。

航ちゃんは、何が食べたいかしら。機嫌を損ねないものを作らないといけない。

この話を聞くのを一番嫌がるのは息子である航ちゃんに違いないのだから。

重い足を引きずりながら歩く海岸通りで、アメフラシと出逢うなんて。

ショックで、あの時考えていた夕食のメニューが消えてしまい、駅前のお惣菜屋さんに立ち寄り酢豚を二百グラム買って電車に揺られた。

「日本天使製綿社製 コンビネーション いたずら防止機能付き（フルオープン型）1万5400円。オールシーズン使えます。可愛い鍵は紛失防止用ライト付き」

インターネットは便利だ。

必要な情報がすぐに取り出せ、報告することができる。

「いたずら」と声に出してみる。

汚物を壁になすりつけるのがいたずらなんて可愛い言葉で済まされるのだろうか。

花柄のピンク色のパジャマをプリントし、キッチンに戻った。

航ちゃんに説明し易いように。

酢豚をお皿に盛り付け、サラダ用に茹で卵を三つ茹でる。

航ちゃんは堅めが好きだ。グラグラ煮立つ小鍋のお湯を見つめながら、ため息を漏らした。

「敵でも味方でもない」

アメフラシはそう言った。

航ちゃんは、義母は、わたしにとってどちらなんだろう。

きっと、どちらでもない。

今までも、これからも、ずっと。

「茹で卵の黄身が、真ん中にないとさ、なーんか、気分が悪いよね」

航ちゃんは好きなはずの茹で卵を箸でよけながら、レタスをつまんだ。

「ごめんなさい。考え事してたら、お鍋の卵をくるくるするの、忘れちゃったの」

航ちゃんの避けた卵を口に入れて、小さく謝る。

味は変わらないのに。

そう言いかけて、言葉を飲みこんだ。

「結局、体のいい拘束だろ？ トイレに行くようにスタッフが声をかけてくれればいいだけだろ？ そのために高い金を毎月払ってんだからさ」

パジャマがプリントされた紙は、航ちゃんの左手で小さく丸めつぶされてしまった。

「でも、本当にすごい匂いで……。みなさん心配してくださって。良い方たちなのよ？ 迷惑よ。出て行くように言われたら、どうしたらいいの？」

「良い方って、お前それは仕事なんだからさー。当たり前だろ？ 香奈は、社会を知らないからすぐに流される。本当なら家に同居したっていいのに、香奈の迷惑を考えて入所してくれてるんだぜ？ 母親も疲れてたんだよ。……もういいよ」

もういいよ、は魔法の言葉だ。

わたしの発言も、行動も、思考も全てを止めさせる。

「同居って、面倒はわたしが見ることを当然だと思ってるの？」

時間が、止まる。

こんな暗い話題を「もういいよ」の魔法で止めた夜も、航ちゃんはセックスをする。会社の愚痴をこぼしながら、わたしの両手首を強く握り乱暴に、する。

「裏切ったら、殺すよ？」

果てる前に、必ず耳元で囁く。

子供を欲しがっているわたしに対するけん制なのだ。

航ちゃんは、子供ができない。

「赤ちゃんをこの手で抱きたいわ」

三十三歳のわたしの誕生日に離婚話を切り出してから、航ちゃんはこの言葉を必ず囁くようになった。

裏切りって、わたしがどこかで子供をつくってきたらってこと？

気持ちの伴わないセックスは、ただの運動だということに気づかないのだろうか。

そして、わたしが昔から運動嫌いなことを、航ちゃんは忘れてしまったのかしらと、哀しくなる。

航ちゃんと、どうやって恋愛して、どうやって結婚生活を始めたのか、すっかり記憶が欠落してしまっている。

枕元のスマートフォンを静かに左手に持ち、動画のサイトを開いた。

小さな、わたしにしか聞こえない小さな音で好きな洋楽を聴いた。

just a castaway an inland lost at sea

隣に寝息を立てている人がいるのに、わたしは、一人の時よりもひとりぼっちだ。

贅沢な痛みだと、何度も言い聞かせて今日も、浅い眠りに落ちる。

くもりの日には傘を持たないと決めている。

よく電車に置き忘れてしまうし（何事にもぼんやりしているからいけないのだが）両手に荷物を持つのが好きではない。できることなら、バックすら持ちたくもない。

義母用のパジャマは航ちゃんの猛反対により、結局用意できなかった。

お詫びではないけれど、スタッフのみなさんへと焼き菓子の詰め合わせを用意した。

「鳴立庵の焼き菓子がいいと思うよ」

パジャマを諦め、義母が直接お世話になっている職員に今後について相談に行く際に、手土産を用意しようと思ったわたしに、航ちゃんはネクタイを締めながら嬉しそうに提案した。

義母が好きな老舗のお菓子屋さんなのだが、施設とは反対方向なうえに、駅からも遠い。黙っていると「一日他にやることないんだから。買い物好きだろ？」と暢気に続けた。

不愉快だわ、と思う。

買い物したかったのは、パジャマなのに。

わたしの気持ちを悟ってなのか「カフェコーナーで香奈の好きなモンブランでも食べておいで」と優しい声を出した。

その声に返事をせず、行ってらっしゃい、と背中を押した。

焼き菓子は、わたしの手と馴染みの男性スタッフの間を行ったり来たりした。

どの菓子司のものであるかなんて、二の次だった。彼は「受け取れません」と低い声を出した。わたしは負けじと「でも困ります」とさらに低い声を出した。

「何かを頂く為に仕事しているわけじゃないんです」と言う彼に「でも、困るわ！こんなにたくさん、わたし、食べきれないもの！」と言うと、彼は吹き出し「ではセンター長に報告してきますから待っていて下さい」とお菓子を持って、スタッフルームへと消えた。

センター長は何度もお礼を言い、丁寧にお辞儀をした。

わたしは、パジャマを用意できなかったことを何度も詫びて、深く頭を下げた。

「親を拘束するって、簡単なことではないですからね」

センター長は今回だけは様子を見ることにしますと、静かに告げて席を立った。

「絹子さんは、普段はとてもしゃんとしていて、おしゃれで。だから、翌朝、しっかりしているときに、真夜中の自分の行動を聞かされた時のショックは、相当なものだと思うんですよ」

彼の出してくれたぬるいお茶を飲みながら、名札を確認すると「佐藤（健）」と書かれていた

。

「本人も理由を説明したら、パジャマが欲しいって。宇宙飛行士みたいなジッパーの付いたやつねって少し嬉しそうでした」

彼の声は、わたしを非難しているのだと分かりやすいほど分かる。

「……佐藤さんって、何人いるのかしら。だって、名札に『かっこ』があるから」

的外れな答えに、彼は眉を少しあげて「ああ、三人いるのです。だから僕は健さんって呼ばれています。健二って名前なんです」と不機嫌そうに答えた。

「宇宙服……そうね。そんな感じだったわ。日本天使製綿のパジャマは、ピンクの宇宙服のようだったわ」

そう答えて席を立つと、佐藤さんは静かに立ち上がり、先回りをして談話室のドアを開けてくれた。お礼を言おうとして、違う言葉が堰を切ったように溢れだした。

「パジャマ、航ちゃんが、あ、夫がとても厭がるの。でもそれって、気持ちが少しは分かるわ。わたしも、もしも両親が生きていて、同じようにいたずら防止してくださいなんて言われたら……。佐藤さんたちには本当にご迷惑をお掛けしたけれど、でも」

そう言うと、小さく手を振って「僕、今日はもうすぐ上がりなんです。この仕事って、二交代制だから、生活が不規則で困ります」と話題を変えて、小さく笑った。

海岸通りを歩いていると、雨が降りはじめた。

本降り、といわれる雨脚の強さだった。

「本降り以外は、なに降りっていいのかしら」

ワンピースが体に張り付く不快さに顔をしかめながらも独りごとが漏れた。

先日アメフラシに出会った岩場を眺めた。相変わらず海岸は淋しい。

「知らないわよ。海の中はいつも本降りの雨だもの」

声が聞こえた。

その声を聞いたら、ふいに涙が零れおちた。慌ててコンクリートの階段を下り、岩場に走り寄る。ヒールに砂が入り、足がざらざらする。

「ねえ、あなたがアメフラシって呼ばれてるの、なんでだか知ってる？ あなたが岩場にいるときには雨が多いからなんですって」

「知らないわ。勝手に人間が付けた名前なんて、関係ないもの」

「じゃあ、あなた達はなんて言う名前でお互いを呼び合っているの？」

「呼び合わないわ。だって、名前なんてただの記号だもの。それより大切なのは、触れ合っていることだわ」

「触れ合い？」

「そうよ。例えばこんな風に会話をしたり、誰かとセックスしたり、そうこと」

「わたし、セックスって好きじゃないわ」

「あら、なぜ？ わたしは大好きよ」

何故かしら？ と首を傾げる。相手によるのかしら。

しかし、昔からわたしは誰かに抱かれるのが好きではなかった。相手の顔色を伺い、出したくもない声を上げ、気持ちの良いフリをした。

子供が欲しければ、セックスしないといけないのが、もどかしかった。

ふいに目の前が一面紫になった。

甘い香りが漂う。

きっと口に入れたら綿菓子味がする。そう思った。

「この色、大好きだわ」

「綺麗でしょう。こんな中で子供をつくって産むの。でも育てないけどね」

「育てないの？」

「そうよ。だって、何万匹産むと思ってるの？ 無理よ」

「そうね。無理ね」

「生きる子は生きるし、死ぬ子は死ぬの。わたしは生きてたから、こうして命を繋ぐ仕事を引き受けているってだけのことよ。あなたは？」

アメフラシはそう言うと、海をじっと見つめた。

「別に答えなくてもいいけどね。愚問だし」

そういうと、アメフラシはくにやりと体を動かした。

触ってもいい？

声に出す前に、アメフラシの背中に触れた。

想像よりも堅く、ぬめぬめしていた。

くすぐったいわ。そこってオスでもメスでもないところなのよ。

とアメフラシが体を逸らした。

オスでもメスでもないって、あなた女でしょう？

「どっちなのかしら。よく分からない。だけと、あなたの声と、匂いと、わたしを撫でる手のあたたかさを良く覚えているわ。懐かしいわ。あの時は、わたし、間違いなく女だったの」

「懐かしい？」

「そうよ。わたし、昔、一度だけ恋をしたことがあるの。ずっと、ずっと過去のこと」

「聞きたいわ。わたしも、ずっと前には恋をしていたはずなの。でもうまく思い出せない」

「いいわよ。でも、女性言葉ってなんだか疲れるの。アメフラシの言葉でいいかしら」

「いいわ。どんな言葉でも」

あの日の、朝焼けの時間の話をしようか。

毎日本降りの雨の中を生きているわたしが、たまには外に出て空気を吸いたくなるのは、仲間からは非難されるべきことであった。

本来、産卵以外には、岩場に姿を出すものではないのである。

厳しい両親には、そう教わってきたから、岩場に出ていいのは、性行為の相手を探すときと、致すときだけ。

そう、決まっていたのであった。

でも、新鮮な空気を吸い込み、紫の雨の中で背伸びをすることが、とても好きだったわたしは、周囲の反対を押し切っては、深い海の底から、朝日のきらめく水面へと泳いだ。

光に、目を細めながら。

岩場に出ると危険が多かった。ノラヒトデは意地悪く突いてくるし、上空を旋回するトンビの目つきの悪さったらなかった。

なによりも人間の「ツンツン」と突いてくるいたずらな指は、無礼な上に、デリケートなわたしの肌に傷をつけることもしばしばだった。

その日の朝は、少し違った。

日光浴を終えて、海へ戻ろうかと思った矢先に、あたたかい指先で、背筋から首筋に向かってやさしく撫でられたのだった。

くにやり、と体の向きを変えて、指の主を見上げた。指先から肘、腕、肩、首、顔と上へ上へとゆっくりと、恐る恐る視線を移した。

茶色い髪がふわふわしている、色の黒い男の子が笑っていた。

「あなた、誰？」

そう問うても、返事はない。

その代わりに、彼はさらにやさしい感触で、するりぬめりとわたしを撫でた。

「こんな日のあたる場所にいたら、乾いちゃうよ」

そう言うと、彼はわたしをそっと両手で包んで、海へ送ってくれた。

あの日の夕日の時間の話をしようか。

夕方に岩場に行くなんて、どうかしているとみんなが反対したけれど、わたしは彼の指が忘れられずにいた。

会いたくて、会いたくて、本降りの海の中で、誰にも悟られないように、海底の波紋の影で、そうっと泣いた。

紫色の涙が、シャボン玉のようにゆるりと海面に向かって、海を漂っていった。

本当に、綺麗だった。

彼に見せてあげたいくらいに。

夕日の眩しさは、鮮やかな橙色で、朝日よりも強烈で、とてもじゃないけど目を開けてはいられなかった。それでわたしは目をぎゅうっと瞑ったまま、上へと泳いで、岩場に「ほうほうのてい」で辿り着いた。

ちなみに「ほうほうのてい」は後に彼が教えてくれた言葉。

一番気に入っている人間ことば。

彼は、朝よりもさらに日に焼けたのか黒くなっているように見えた。だから眉間にかかる髪が、さらに明るく茶色く光って見えたのだった。

彼は驚くことに、わたしのことが、誰だか分かったようだった。

「また来たの？」と言うと、朝よりも積極的にわたしを知ろうとしてきた。

掌にひよいとのお腹を擦りながら、もう片方の手で、ゆっくりと、微かに撫でた。何度も、何度も。

わたしは、うっとり目を閉じ、彼の指先の温度と溶けあって、優しい囁き声に耳をすませ、ふいに立ち香る甘い塩気のある体臭に鼻をぴくぴくと、させた。

あの日の月明かりの時間の話をしようか。

青白い月明かりは、海面へのやさしい道標にとり、お陰でわたしはしっかりと目を開いたまま、月を目指して泳いだ。

彼は、彼女と海に遊びに来ているようだった。わたしを手に「抱いている」彼の隣には、彼女がいたから。

一緒にいた彼女は、波打つ長い髪をもっていて、彼とは対照的に色の白い人だった。わたしは自分の肌の色をこんなに恨めしいと思った夜は無かった。

無機質なコンクリートのような色。まるで、砂浜から国道に上がるときにみんなが踏み歩いてボロボロになっている階段と同じ。そんな風に思った。

その瞬間、彼の隣にいる彼女に思い切り踏みつけられたような錯覚に陥って、紫の涙をぐっと堪えた。

それなのに、彼はわたしの心を知ってか知らずか、優しく撫で続け、その愛撫に応えながらわたしは、ぐにやりぐにやりと体を逸らした。

わたしの体に、雄と雌の器官が両方ついていることを、初めて知った。

そして青い月明かりに照らされながら、彼との子供だったら欲しいなと切に思った。

体に一瞬激痛が走り、意図してないのに紫の雨に包まれた。

彼は「またね」と優しく声をかけてから、わたしを波が届きそうで届かない、そんなもどかしい場所にそっと置いてくれた。

二人の影が、くっついたり離れたりしながら、コンクリートの階段をゆっくり上るのを、見送った。

それからそっと目を閉じて、彼の温度を思い出しながら、わたしは、はじめて卵を産んだ。

たくさん、たくさん。

彼の卵のはずなのに、わたしはひとりぼっちで、産み続けた。

それが、もう、ずっと、ずっと前のこと。

わたしの匂いが、その彼と同じなの？

そうよ。だから、きっとわたしとあなたは、あの時の彼と、わたし。

もっとわたしを指先で触れてみて。撫でてみて。愛してみて。思い出した？

恋をしていたはずなのに、わたしはまだ思い出すことができない。

航ちゃんは、施設の方々が、お菓子を受け取ってくれたことに満足していた。お菓子を食べることは、義母のパジャマの話を忘れてもらえることとイコールになっているようだった。

「あのお菓子は美味しいから、きっとみんな喜ぶよ」

機嫌が良いせいか、部屋に掃除機をかけてくれると言いだした。

音がうるさいからいいわよ。その声を振り切るようにスイッチを強にして「四角い部屋を丸く掃くのは、僕がよくできたーおくさまー」とでたらめの歌を歌いながら、隅々まで丁寧に掃除機で掃き清めた。

「あれ？ 海にでも行ったの？」

掃除機のスイッチを切り、手を止めて、わたしの足もとをじっと見つめている。

砂が、落ちていた。

「いいえ。風に舞ってきたのかしら。ほら、施設に行くときは海沿いを歩くから」

「そうか。海で思い出したよ。野球のチケットをもらったんだ。見に行こうか」

「いいわね。でも海と野球、どんな関係があるの？」

「さあ」

航ちゃんは再び掃除機のスイッチを入れて、わたしの足を軽く突いてきた。

でたらめの歌をうたいながら。

曇りの日は、義母の様子を見に行った。傘を持たずに。本降りの中のアメフラシとの長話で風邪をひき始めていたわたしは、雨の日は外に一步も出ないで、過ごした。

なによりも、傘を、荷物を持ちたくなかった。

佐藤さんは、とても親切に見えた。どのお客さんとも楽しそうに話をしていたし、呼ばれれば厭な顔ひとつせず、飛んでいった。

義母は、佐藤さんにすっかり心を開いている様子で、それはまるで、女学生が学校の教師に向けているものと同類であった。

義母は、最近描いた絵手紙を、佐藤さん宛てにしたらしい。机の上に、隠すでもなく一枚の絵葉書が置いてあった。

住所などの個人情報はお互いに教えるのを禁止されているので、宛名欄の真ん中には大きく「佐藤健二様」とだけ、真っ直ぐに書かれていた。

色鮮やかなアジサイの絵だった。

投函できないから、手渡しするのだろうか。

佐藤さんの筋張った、大きな手を思い出した。

義母に、先日航ちゃんが掃除機をかけてくれた話をした。

「あの子は、昔から何をやるにも丁寧な、慎重な子なのよ。間違いが、嫌いな子なの」

的外れな答えに、ただ頷きながら、最近新しく処方してもらった睡眠薬について、説明をした。義母は「毒じゃないなら、なんでもいいわ」と興味のない声を出した。

わたしは、この人と初めて会った時のことが思い出せない。

航ちゃんとお付き合いをして2年過ぎたころに紹介を受けたはずだった。

緊張して「嫁」としての採点を受けたはずなのに、その時のことが、上手に思い出せない。

降りだしてしまった冷たい雨のなか、咳をしながら家庭の愚痴を、アメフラシにこぼす。アメフラシは、時に静かに、時に激しく首を縦に振りながら聞いている。

時折り「最低ね！」とか「それは、あなたも悪いわよう」と非難染みた返答をしながら、何事にも動揺することなく、聞いてくれる。

「あなたって、やっぱりずっと前に、一日の恋に落ちた生まれ変わりね。だって、こんなにも気になるんだもの」

アメフラシを撫でながら囁くと、彼女は体をぶるるっと震わせた。

「ごめんなさい。わたし、あの時の恋が終わってから、なにも感じなくなっちゃったのよ。誰とでも寝ちゃうし、あなたがまたわたしを撫でてくれる指は同じなのに、思い出すのはあの茶色いふわふわの毛なの」

「そう。でも仕方ないわ。過去には戻れないんですもの。気にしないで」

「見てて」

海から何十体ものアメフラシが、体をくねらせながら、波音とおしゃべりをしながら、岩場へ上ってきた。

「子孫を残すのは本能なのである。しかし、本能だけで生きているのでは、単細胞極まりないのである」

「しかし、本能に抗っては生きていけないのも、事実である」

「で、ある」

「何千分の一という生存競争を生き抜いてきた我々としては、もっと知的に生きたいと、切に思っているのである」

「で、ある」

四方八方からやってきた個体同士が一本の鎖のように繋がった。ぬめり、ぬらりと体を揺らしながら、お互いに囁き合いながら、体を重ねた。

その中には、もちろんずっと昔にわたしとの卵を産んでくれたアメフラシも、いる。

昔、生物の教科書で読んだことがあった。雌雄胴体。頭と背中にそれぞれの生殖器官があり、何個体も繋がって交尾する生き物がいた。

アメフラシは、そういう生き物なのだ。

紫の雨の中で、アメフラシは笑っていた。「あなたのご主人のように、子供が作れない雄の悲しみも、分かるわ。だって、わたし両方もっているんだもの。どっちも大事だわ。でも一番大事なものは、雄雌関係なく、心から触れ合うってことだわ。卵の黄身なんて、端でも真ん中でも、どうでもいいわよね。くだらないわ」そう言い残して、アメフラシ達は海へと消えた。

雨が上がり、雨雲の隙間から太陽の光が落ちてきた。

天使のカーテン。

先ほどまでの岩場の出来事は夢だったのかもしれない。

砂を蹴りながら砂浜を歩いていると、車道から名前を呼ぶ声が聞こえた。

見上げると佐藤さんが手を振っている。

「なんでずぶ濡れなの？」

わたしも自然と手を振り返した。

「傘を持つのが嫌いなの！」

ワンピースの裾から、肩へ掛る黒髪から、まつ毛から、体のいたるところから、雨が流れ落ちている。自然と笑顔で佐藤さんの元に駆け寄った。

一人暮らしの男性の部屋を見たのは、生まれて初めての経験だった。

狭い部屋なのに、テレビが大きくておかしかった。

「だって、薄型テレビって安くなったからさ。つい無駄に大きいの選んじゃって。家電屋って広いからさ、部屋の大きさを忘れてものを選んじゃうんだよね」

わたしの頭を左手で抱き寄せながら、嬉しそうに話し出した。

「あのお洒落な卓上ランプは？ 彼女の趣味？」

「いや、僕の趣味。へん？」

「いいえ。じゃあ、あの愛らしいペンスタンドは？」

「施設でもらったの。なんで女の影を探す？」

だって、女性が存在してくれてないと困るもの、という言葉呑みこんだ。

「僕、こうなることは、分かってたんです」

佐藤さんは髪を撫でる指先に力を込めた。

「わたしも」と嘘をついた。

「おかしいと思うかもしれないけれど、僕はあなたの髪を撫でる感触を、本能で分かってたんです。この滑る感触を、知ってた」

避妊をしなくてはならないという理性が、彼の甘い声で飛びそうになり慌てて両足を閉じた。

「首筋が、ミントの匂いがする」

「石鹸の香りよ。気に入ってるの」

セックスを苦痛に感じなかったじぶんが、淋しくなった。

淋しさとミントの香りは相性が、いい。

梅雨は嫌いではない。

航ちゃんは毎朝「傘を持っていく方がいいかな？」とわたしに確認をする。

そのたびに「梅雨時期なもの」と答える。「答えになってないよ」と笑いながらも航ちゃんは黒い大きなこうもりを持って出社する。

朝の会話が生まれるだけでも、ありがたい。

「わたし、今日、帰りが遅くなるわ」

「どうして？」

航ちゃんは初めて聞いたように驚く。

わたしが今日、義母に会いに行き、その後短大時代の友人たちと食事をするのは、二週間も前から伝えてあったのに。

黙っていると「そうだ。思い出したよ。楽しんでおいでよ。夕食はテーブルに置いてよ」と笑ってドアを開けた。

毎週月曜日には、航ちゃんは会議があり、その後は会社の人達と毎週夕食とお酒を共にしている。

家では食事をしないのだ。

それを知っているからこの日に友人と会う予定を組んだのに、御夕飯をテーブルに用意しておくだなんて、どうかしている。

航ちゃんはわたしが友人と会うのを良しとしていない。

とくに社会に出て働いている短大時代の友人と会うのを、嫌っている。

子供を持つ母親になった同級生に会うのを、さらに嫌っている。

柔らかい檻のなかで、わたしはそれなりに自由に暮らしている。あれもダメ、これもダメ。そう言われながらも、全て言うことを聞いているわけでもなく、かといって無視することもできずに。

義母の部屋をノックして入ると、ベッドに腰掛けている義母が、向かいのパイプ椅子に腰を掛けている佐藤さんに爪を切ってもらっていた。

南を向いた窓からは柔らかく日が差し込み、向かい合う二人はまるで絵に描かれた親子のように見えた。

嬉しそうに眼を細めている義母と、爪に丁寧に鑢をかけている佐藤さん。

あの日、わたしを抱いて、優しく髪を撫でていた指先が、今は義母の曲がったカサカサの指に触れている。

頭に血が上り、頬が熱くなるのが分かった。

小さく深呼吸してから「こんにちは。今日は、雨が降らないわね」と声を出した。

佐藤さんの視線が絡みつき、わたしの体を堅くさせた。

義母はわたしの姿を目の端で捉えると、うれしそうにほほ笑み「今ね、綺麗にさせていただいているの。自分で爪が切れなくなっちゃって。透明のマニキュアもね、塗ってくださるって」と少女のようにはしゃいだ。

「色がついたものは、健康管理の点からも医師から禁止されてるんですが、透明ならいいって」と佐藤さんは上ずった声を上げた。

「香奈さんは、いつも綺麗な指先をしているから、わたしも負けられないと思ったのよ」義母の声に弾かれるように、佐藤さんの視線がわたしの指先に移った。

そっと手を後ろに回して隠した。

義母は、わたしの指先を嫌っていた。

そんなに爪を伸ばして。

色を塗って。

ちゃんとお料理しているの？

アイロンが雑ね。

外に出る仕事をしているわけじゃないんだから、そんな気を遣わなくても、誰も見てないのに。

見ている本人から「誰も見てない」と言われるのが可笑しくて、わたしはいつもスイマセンと小さく謝ってから、笑った。

「外にでなくていいなんて幸せね。香奈さんの亡くなったご両親もきっと嬉しそうに今のあなたを見ていると思うわよ」

そんな言葉にも、小さく謝ってから、笑った。

自宅から持ってきた義母の着替えを、紙袋から取り出し、丁寧にクローゼットに仕舞う。

保湿成分の含まれたティッシュペーパーをドレッサーに置いた。

鼻をかむのは、柔らかいティッシュじゃないと痛くて厭なのだと言われたのだった。

義母は、最近若返り始めている。

突然赤い口紅を欲しがったり、爪を綺麗にしたがったり、頬紅を濃く塗るようになった。

おかしいから辞めるようにと注意をすれば、泣きだすようになった。

これが、この人の老い方なのだろうか。元気だったころには、化粧気の無い人だった。

言葉使いも乱暴で、竹を割ったような快活な性格だった。

わたしとは合わなかっただけのことで、もしも親戚のおばさん程度の血縁者だったなら、その程度の距離に義母がいてくれたなら、きっと好きになっていた。

航ちゃんは、義母がお洒落に興味を持ちだしたことを喜んでいる。

若返っているってことだろ？ と的外れなことを言う。

狂い咲きじゃないの？

という言葉呑み込み、そうかもしれないわね、と優しく声に出す。

夜中に、オムツをはずして暴れているなんて、きっと嘘ね。

そう付け足すと、満足げに頷き、わたしの両手首を強く握る。

航ちゃんは相変わらず拘束パジャマを良しとしない。人に迷惑をかけるのも、お金を払ってあげばいいと思っているのだろう。

わたしとのセックスにもお金を払っていると、考えているのかもしれない。

「殺すよ？」

冷たい、甘い声が木魂する。

佐藤さんは丁寧にマニキュアを塗っている。義母は既に塗られた左手に息を吹きかけて、満足げにほほ笑んでいる。

わたしは、見ないふりをして、ドレッサーの上を整理する。

匂いの染みついていたクロスを貼り替えたのに、部屋にあの日の匂いがこもっているように感じ、用意してきた部屋用のフレグランスを開けた。

液体の入った緑色の瓶に、紙で作られた白いダリアの花を一輪差す。表面張力でダリアにはオレンジ色の液体がゆっくりと吸い込まれ、色づく。フローラルブーケの香りがゆっくりと広がった。

マニキュアを塗り終えた佐藤さんは、暫く義母と昨晚観たらしいテレビ番組の話をしてしたが、PHSの呼び出し音と同時にパイプ椅子から立ち上がり、じゃあ、と挨拶をした。

部屋を出るときに、わたしの足もとに小さな紙を落としていった。

拾うとそれには、先日行った彼の家地図と携帯電話番号が書かれていた。

義母が視界の隅に入った。

静かな顔をしている。

紙をゴミ箱に捨てるふりをして、ポケットにそっと隠した。

義母は、頷き、嬉しそうに爪先を眺めている。

「落とし物は勝手にゴミ箱に捨てたら失礼よ。あ、捨ててなかったわね。香奈さん……」

電車で揺られることは好きなのに、あの閉鎖された空間を怖いと感じてしまうのは、きっと大勢

の人を見ることがない生活をしているためだと思う。

はす向かいに座っている女性のズックを、おずおずと、しかし、しっかりと見つめる。歩き方に癖があるのか、ゴムのソールの減り方がアンバランスで、気にかかる。

その女性は白髪が目立つ。その白髪が窓から差込む日差しに反射するたびに、地味に輝く。疲れていそうだわ、と声に出しそうになり、慌てて飲み込んだ。

そして、ふと、背筋が寒くなる。

わたしも、髪の毛を染めることもやめて、ズックを履いて、首をうなだれて電車で揺られていたら、周りの人たちにはそう思われてしまうのかもしれない。

わたしが実際に疲れているか否かは問題とされず、見ず知らずの他人に「疲れている人」と認識されるのだ。

大きく首を振り、ひざの上に乗せていたカバンからハンカチを取り出し、口元に当てた。

そんな考え方をするわたし自身が、疲れているだけなのだと、ひとり、ハンカチの影で冷笑する。

女性が4人も集まると、話題が尽きることはない。

半年振りに会う短大時代の友人たちは、体型に多少の変化は見られるものの、あのころと変わらない。13年前と同じ笑顔で、同じ声で話をする。ただ違うのは、話の内容なのだった。

学生時代の話題は、当時お付き合いしている男性に占められていたのに、いまは誰もそれぞれの夫の話をしようとはしない。

それは、とても不自然なことのようにも思えたが、かといって自分からその話題に触れようとは、やはり思わない。

そのくせ、女性しかいない場所にくると、無性に航ちゃんを思い出す。そして「思い出す」という瞬間に、ひどく驚いてしまう。

忘れていたという現実には。

驚いた顔をつくろいながら、冷めた紅茶を口に含む。「渋すぎるわ」とつぶやき、溶けない各砂糖をカップに落とした。

三人の友達は、それぞれの子供の成長について話をしている。

砂遊びがいいらしいわよ。

あら、でも、公園の砂場は猫のトイレになっていて汚いわよ。

しらないの？

家庭用の砂遊び用の砂が今は売っているのよ。その砂で遊べば衛生的でしょう。

この話題についていけないわけではない。砂遊び用の砂が子供のおもちゃとしては高価なものだと知っているし、いつも散歩する公園の砂場は「たま」と勝手に命名した野良猫のトイレになっていることを話したい。その猫がいかに賢くて、やわらかくて、温かいかを教えたい。

しかし、それはこの三人と別の世界にわたしが住んでいることの証明になりそうで、口をつぐむ。

子供がいない主婦は、目線が違うわね、そう言われて終わるのがオチだ。

アメフラシと友達になったのよ。

そう話題を振ってみると「相変わらず、あなたって子は」と三人とも苦虫をかみつぶしたような笑顔を見せた。

ほんとうなのよ。

そう続けると「はいはい。香奈も少し外に出たほうがいいわよ。家に閉じこもっていると、頭がファンタジーになっちゃうのね」と呆れられる。

浮気しているの。

そう言ったら、どうなるのだろうか。蜂の巣をつついた騒ぎになるのだろうかと思像して、一人笑った。

佐藤さんに会いたいな。

小さく呟いてみると、その言葉は生きた鎖のようにわたしの体を強く縛り付け、息を止める。「殺すよ？」

両手首に鈍い痛みが走った。

友人たちは、ジャムの作り方の話をしていた。いつの間にか話題が変わっていた。慌てて話を合わせる。

イチゴのジャムは酸っぱい方が好きだけど、お砂糖が少ないと痛むのが早いよね……。

地下鉄を乗り継いでいる間、可笑しくてたまらなかった。

友人たちとの待ち合わせに向かう車内では、周囲の人達が、他人のズックが気になって仕方なかったのに、気持ちが焦っている今は、周りになんてかまってはられない。

今の状況を何と言うのだろうか。

口の悪いアメフラシなら「まるで、さかりのついた猫ね」と言うかもしれない。そして「でも、触れ合うことが重要なよ」と続けるだろう。

誰かに抱かれるために、電車を乗り継ぐことが、わたしの人生の中で起こるなんて不思議だ。

不良、と小さく呟いてみると、なんだかくすぐったい気持になった。

愛情を失った男女が、一つ屋根の下に暮らしていても、心が通じ合っていなければ、別居しているのと変わらないのだ。

わたしと航ちゃんは、お互いの姿を視界の隅にとどめながらも、真正面から見つめることができなくなっていた。お互いに、寄りかかることも、突き放すこともできない関係になっていたのだ。

それが、夫婦の形として間違っているとは思わない。

人としては、母親をあたたかいパジャマで拘束することすら怖がる彼を、愛している。

わたしが何かを、誰かを裏切っているとすれば、それはわたしの気持ちの変化に気付いている義母を、かもしれない。

義母は気付いていて、マニキュアを塗った爪を眺めていた。

そして、それは、黙っていてあげるから、航ちゃんを捨てないで、というメッセージなのだ。

子供ができないわたしを「生まれ女」だと責めていた義母に、子供のできない原因はあなたの息

子にあるのだと告白した時、彼女は真っ直ぐな目をして、笑った。

「あら。香奈さんと航ちゃんは愛し合って結婚したのでしょうか。子供がいる、いないは、二人の仲には関係の無い話ね。子供がいない夫婦の方が仲はいいなんて耳にもするし」

黙っているわたしに「性行為の後に逆立ちしなさいなんて言って、悪かったわね。運動神経が鈍い香奈さんに、出来そうもないことを強要して、申し訳なかったとおもっていたの」と続けた。

。

わたしは、あの瞬間、柔らかい檻から逃げることを諦めたのかもしれない。

「大丈夫です。そんな原始的なこと、しなかったから気にしないでください」と、きっぱりと、返事を、した。

あの日が、わたしが航ちゃんとの恋を忘れた日だったのかもしれない。

メールで友人に「わたしが酔いつぶれて寝てしまったから一晩泊めると伝えて」と頼んだ。

友人は、すぐに「了解。事情はあとで聞くからね」と返事をくれた。

きっと彼女なら航ちゃんにうまく説明してくれているだろう。普段お酒を飲まないわたしが、呑むとすぐに眠くなってしまうことは、航ちゃんも知っている。

怪しまれる心配はない。

佐藤さんは、わたしの両手を握り、爪先に頬を寄せている。

「なんで隠したの？」

「だって、家事ができなそうな爪でしょう？」

「そんなこと、綺麗なのに。……もういいよ」

もういいよは、魔法の言葉のはずなのに、わたしは自由に動ける。声を上げることができる。

佐藤さんは、わたしにたくさんのものをくれる。

それは「ほっこりとしていて、あたたかくて、やわらかい」ものたち。

「わたしに、あなたを、ずっと好きでいさせて」という言葉に「がんばります」と、笑う。

ただ、わたしはお願いをしても、されることは拒否する。

わたしを好きになってくれても、わたしが彼にあげられるのは、いくらかの時間とセックスでの快楽程度のものしかないのだ。何も持っていないわたしには、もらったものに対する対価を支払う能力が、ない。

「わたし、働こうかしら」

佐藤さんの腕の中で呟くと、佐藤さんは「どんな仕事？」と聞いてきた。

「とりあえず、何でもいいの」

「あら、頼もしい。旦那さん反対するんじゃない？」

「そうね。きっと、するわね」

「そろそろ、僕に本気になってよ」

「そうね」

「ひどい。心がこもってない……」

「ほんと、ひどいわね」

夜明けまでに、もう一回、した。

こんなに体が疲れて、寝不足で、神経が高ぶっているのは初めての経験だった。

佐藤さんに駅まで送ってもらい、誰もいない改札口で、素早くキスをした。

家の玄関を開けると、スーツ姿の航ちゃんが靴に付いた泥を布で払っていた。

「ただいま」とゆっくり唱える。

航ちゃんは一瞬息を止めてから「おかえり」とほほ笑んだ。

「日本酒呑んだんだって？ 駄目だよ。グルグルしちゃったろ？」

心の中で、ごめんなさいと謝った。

スーツに皺が寄らない程度に、ぎゅっと両腕で航ちゃんに抱きついた。

航ちゃんの両手は、わたしの背中に回ることにはなかったけれど、代わりに頭をポンポンポンと三回叩かれた。

「今日、仕事が少し早く上がれるから。野球に行こう。球場の外野ライト側の入口で待ち合わせ」と早口で一方向的に告げると、開け放しになっていたドアから、出て行った。

ほっとして、あくびが出た。シャワーを浴びて、少し眠ろう。

最低だわ、と声に出すと泣き出しそうになった。泣く権利もない。わたしには、紫の雨を降らす権利も、ない。

アメフラシに会いたくなかった。

シャワーを浴びながら、紫色の涙が揺れる深海を思った。

野球は退屈な試合運びだった。投手戦になっていて、どちらのチームも点が入らないまま7回の表が終わった。

チアガールがけたたましい音楽とともにグラウンドにはじけ飛んできて「ラッキーセブン！」と叫び、応援歌に合わせて体を揺らした。

「かわいいわね」と言うと航ちゃんは「そうでもないよ」とビールを飲みながら、そうでもないよ、と繰り返した。

「一口ちょうだい」と、航ちゃんの手から生ビールの紙コップを奪い、ぐびりと呑んだ。温くて、苦くて、ざらりとした。

球場の座席は密着していて、わたしと航ちゃんは何度も肩が重なった。

応援席は空いているのだから、一つ席を空けて座ればいいだけなのに、そうしないまま隣で窮屈に座り続けた。

突然、わたしの左手を航ちゃんの右手が掴んだ。

横目で顔を盗み見しても、航ちゃんは真正面を向いている。

まるで手なんて繋いでいないとでもいうように。

わたしも軽く左手に力を込めて握り返した。

別れはいつだって、不意に、穏やかにやってくる。

義母の認知が進んだようだと、ケアマネージャーから電話がかかってきた。

介護度認定の変更をするために、書類に印鑑を押した。この押印が、航ちゃんの名字の印鑑の利用した最後となった。

佐藤さんの仕事が終わるのを、駅前のコンビニエンスストアで待った。読みたくもない週刊誌をパラパラとめくりながら。

佐藤さんは、そっと隣にやってくると、二本缶コーヒーを買って、先にお店を後にした。少し離れて、ついて行く。職場の人に見つかったら、厄介だと思った。

離れ離れでゆっくりと歩きながら、海へ向かった。

海岸沿いにある水族館へ行こうと誘われたのだった。佐藤さんはわたしが海を好きだと思っているのだ。

実際嫌いではないが、特に好きなわけでもない。それでも、結婚して五年、一度も他の男性とデートなどしていないわたしにとっては、それは胸が躍る提案だった。駅から真っ直ぐに海への道を歩く。

観光名所でもあるその駅から海へ続く道は、両サイドにお土産屋さんが並んでいる。貝殻の専門店、佐藤さんは唇貝を一つ買ってくれた。

ほのかにピンクに染まった貝は、恋の成就のおまじない効果があるのだという。

「じゃあ、健二さんが持った方がいいわよ。これからの良い縁に」と笑うと、少し拗ねた。そんな様子を可愛いと思う。

しかしこの先のことは何も分からない。

海には人がまばらだった。

平日でもあるし、何よりも雲が重たかった。

いつもの癖で岩場に目をやると、紫の雨が見えた。一生懸命話かけてくれている佐藤さんを見無視して、岩場へ駆け寄った。

あのアメフラシなのに、澄ました顔をしている。

つんとして、話かけてこない。

わたしは淋しくなって「ねえ」と声をかけてみた。

「なんだよ」

とあの声と同じなのに、乱暴な言葉が帰って来た。

アメフラシの周囲には何万もの小さな卵が散らばっている。

産卵していたのだ。

「産卵って、大変。産んだことが無いあなたには分からないだろうけれど」

頭に、きた。

アメフラシのような軟体生物に、全否定された気がして、頬が熱くなった。

「産んだからって偉そうに何よ。お産を終えたからって。雄なのか雌なのかはっきりしなさいよ」

「どっちでもない。なんか、裏切られた気分なんだよね。なに、その隣の男。ぐにゃぐにゃし合ったからって、なんでも分かってるような顔しちゃって。あんただって、なによ。自立した女ですみたいな顔しちゃって」

「裏切るって。わたし、そんなつもりないわよ」

「うまく言えないけど、もう、わたしのことは、必要ないでしょ。またすっかり忘れて、生まれ変わって、恋を忘れたの……なんて言うんでしょう。わたしは、ずっと、ずっと姿を変えないで、待ってたのに」

そう言い残し、アメフラシはゆっくりと海へと滑っていった。

「雨のころ、きっとよ。また、会うわよ」

泣き出しそうになるのを、堪えるのに必死だった。

佐藤さんは、わたしを不思議そうに眺めている。

なにをしているの？

なにをって、アメフラシが帰っちゃったのよ。

アメフラシって？

見えないの？

佐藤さん、目が悪いの？

人工的に作られた大水槽の中で、魚たちは気持ちよさそうに泳いでいる。時折り空からごはんが降ってくる小さな海で、ゆったりと泳いでいる。

暗いコーナーに、色鮮やかなアメフラシが住んでいた。

外国のアメフラシは、どうしてこんなに目立つ色をしているのかしら。

水槽のガラスを爪先で小さく叩きながら「目立ちたがりね」と声をかけた。

「アメフラシってこれのことか」

佐藤さんは、満足気に頷いている。

違うわ。

わたしの知っているアメフラシは、もっと地味で、賢くて、愛おしくて、紫の雨に打たれているの。

そう答えようとして辞めた。

きっと伝わらない。アメフラシのお陰でわたしは、佐藤さんとの一步を踏み出したことなど、伝えようがない。

「健二さん、クラゲ好き？」

「わかんない。見に行こうか」

そっと手を繋いで、クラゲの展示コーナーへ向かう。

この先、この手が離れるのか、繋がれたままになるのかは分からない。

手を繋いだままの別れも、あるのだ。

分かっているのはただ、わたしには帰るべき家があることと、航ちゃんと向き合わなければならないという現実と、拘束パジャマをやはり注文するということだ。

すべてから、みんなが目を逸らして生きている。

それは、なんて愚かで、なんて正直で愛おしいことか。

アメフラシに今度会う時には、逆に悩みを聞いてあげようと思う。

「あら、連結交尾なんて普通よ。愛し合っていれば、雄だの雌だの……形なんてどうでもいい

のよ」と、説教をしてあげよう。

水族館内にあるお土産コーナー「ドルフィンショップ」でアルバイトの求人広告が貼り出されていた。その場ですぐに詳細を問い合わせ、翌日には履歴書を持っていった。

時給890円。

久しぶりにお給金をいただけることが、純粹にうれしかった。

元義母、といういい方が正しいのだろうか。航ちゃんの母親が息を引き取ったのは、重たい夏の雲が、高い空に吸い込まれ始めた秋の入口の頃だった。

喪主の航ちゃんの隣には、わたしがいる。

籍は抜いていても、同居している関係なので、世間一般では内縁の妻ということになるのかもしれない。

義母の爪が綺麗なのが印象的だった。

佐藤さんが、拘束パジャマを着た義母の爪を丁寧に切って、ベージュのマニキュアを塗ってくれたのだという。

焼香には佐藤さんも足を運んでくれていた。

泣いたのだろうか、赤い目をしていた。

わたしは、航ちゃんの喪服の裾を引っ張り「一番お世話になっていたスタッフさんなのよ」と教えると、航ちゃんは深々と、素直に頭を下げた。

佐藤さんは、さらに深く頭を下げた後に、わたしを正面から見つめた。

航ちゃんと離婚が成立した日、佐藤さんの部屋に行った。

離婚はしても、同居する。

そんなおかしい関係になることを伝えに行ったのだった。

繋いだ手は、離せられないの。

そういうわたしを、佐藤さんは不思議な生物でもみるような、不躰な目つきで見つめ返してきた。

わたしは、子供を強く望んでなどいなかった。ただ、別れる理由として利用したかっただけのことだったのだ。

本当にこの手に赤ちゃんを抱きたいと望んでいたなら、わたしは航ちゃんに「種なし」と怒鳴りちらし、喚いて、泣いて感情をあらわにすべきだったのだ。

アメフラシの産卵を見て、潰してやりたいくらいの衝撃を受けてもよかったはずなのだ。でも、わたしはそうはならなかった。

そして、球場での静かな別れ話に、泣いて困惑している航ちゃんと、結局離れることができなかった。

航ちゃんが泣いているのは、わたしへの愛情のためではないのが、繋いだ手から伝わってきた。愛情ではなく執着。

航ちゃんに、女としては振られてしまった。

そんな喪失感を強く感じた。

航ちゃんに恋していたころを微かに思い出した時、もう一度やり直したいと強く感じた。

でも、何をどこからやり直したらいいのかすら、分からなくなっていた。

こんがらがった糸は、もう、解けない。

アメフラシに相談したら、きっと「あなたと別れた方が、航ちゃんはいい人と巡り合うわよ。だって、忘れた恋を思い出したって、元には戻れないんだもの」と答えるだろう。それから「でも、あなたにとって、佐藤さんがいい人とは思えないけどね」と付け足す。

わたしは航ちゃんの隣にいながらも、佐藤さんが欲しかった。

ふわふわ、あたたかいものを与え続けてくれる佐藤さんに甘えていたかったのだ。

そういうわたしに、佐藤さんはずるいよとだけ答えた。

佐藤さんは、ただ下を向いて、ずるいとだけ繰り返した。

わたしは、頷いてその声を聞いていた。

「ずるいかもしれないけど、間違っていないわ」というと「間違っているよ」と声を絞り出した。

その「間違っているよ」を耳に残しながら、二人で岩場まで歩いた。

風は穏やかだった。

波待ちしているサーファーたちが、甲羅干しをしている亀のようだった。

「あんなに動かない運動、珍しいわね」と言う

「サーフィンを運動っていう人、初めてだよ」と佐藤さんは笑った。

「最後に、爪を塗ってあげていたときにね、『香奈さんは何でも欲しがって。我儘な人』って、言ってた。決して悪口という風ではなくてね。僕は、つい、そうなんですよねって答えた」

「ふうん。それで？」

「あら、分かっているながら、あなたたち、お付き合いしてるの？って、笑ってた」

佐藤さんは今日も相変わらず施設で誰かの爪を切っている。

その器用な指先で時々、わたしの髪や体を撫でる。

最近の航ちゃんは、夕食時に合コンに出た話などをする。

結構可愛い子がいたよとか、話が合いそうな人がいたとか、盛り上がらなかったとか。

サラダに乗っている黄身の偏った茹で卵を、美味しそうに頬張る。

なんだか、航ちゃん、楽しそうね。

そう言うわたしに、少しは妬いてよ、と笑う。

本当は、少し妬いているの。

そんな言葉を呑みこんで、笑い返す。

心地よい会話は穏やかな波の音に、似ている。